

花山長者補助
素鐵公戲著
非免故魯史跋
二州情仙序

瘧

螺

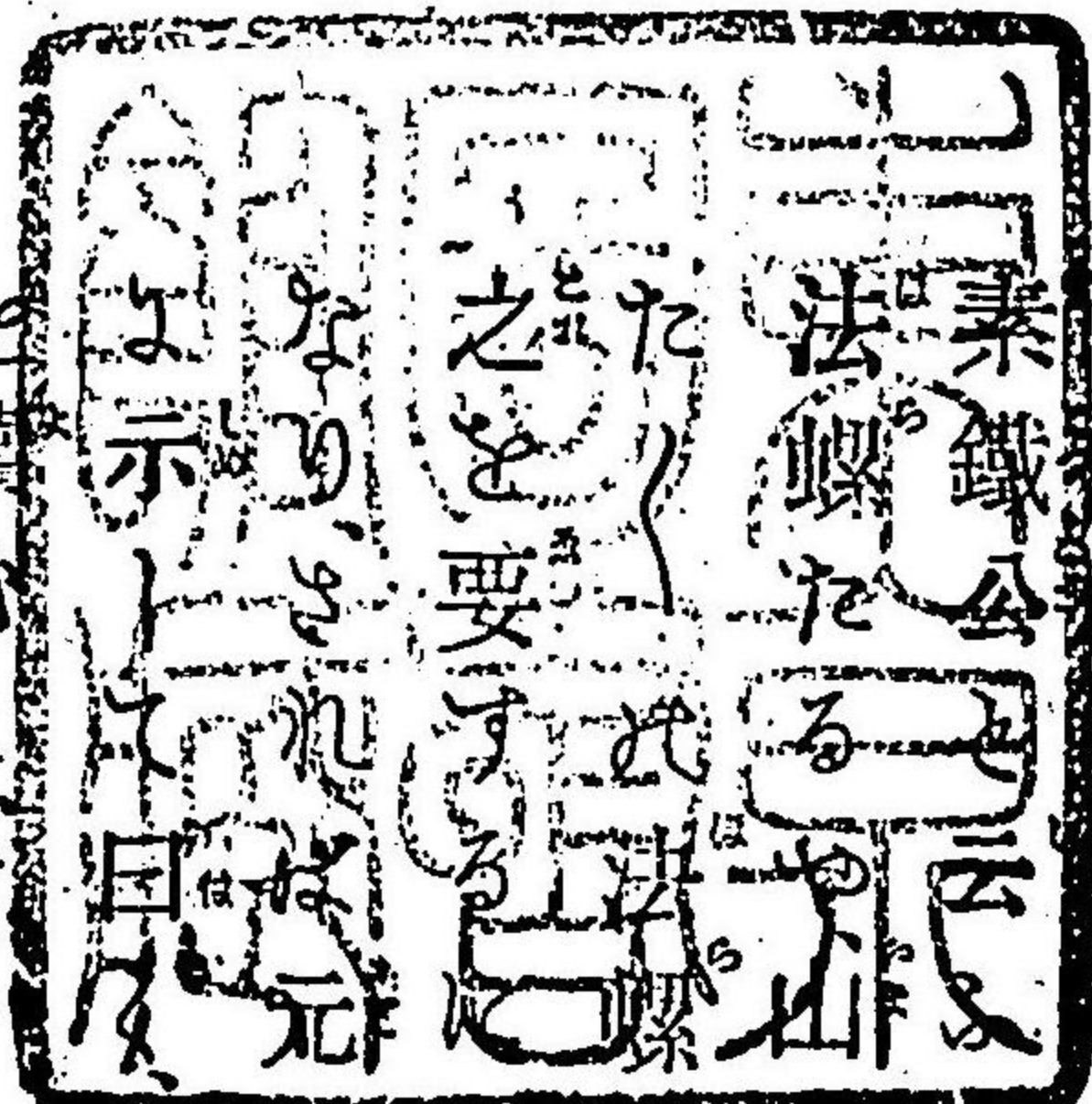
全

大阪

綺文館發兌

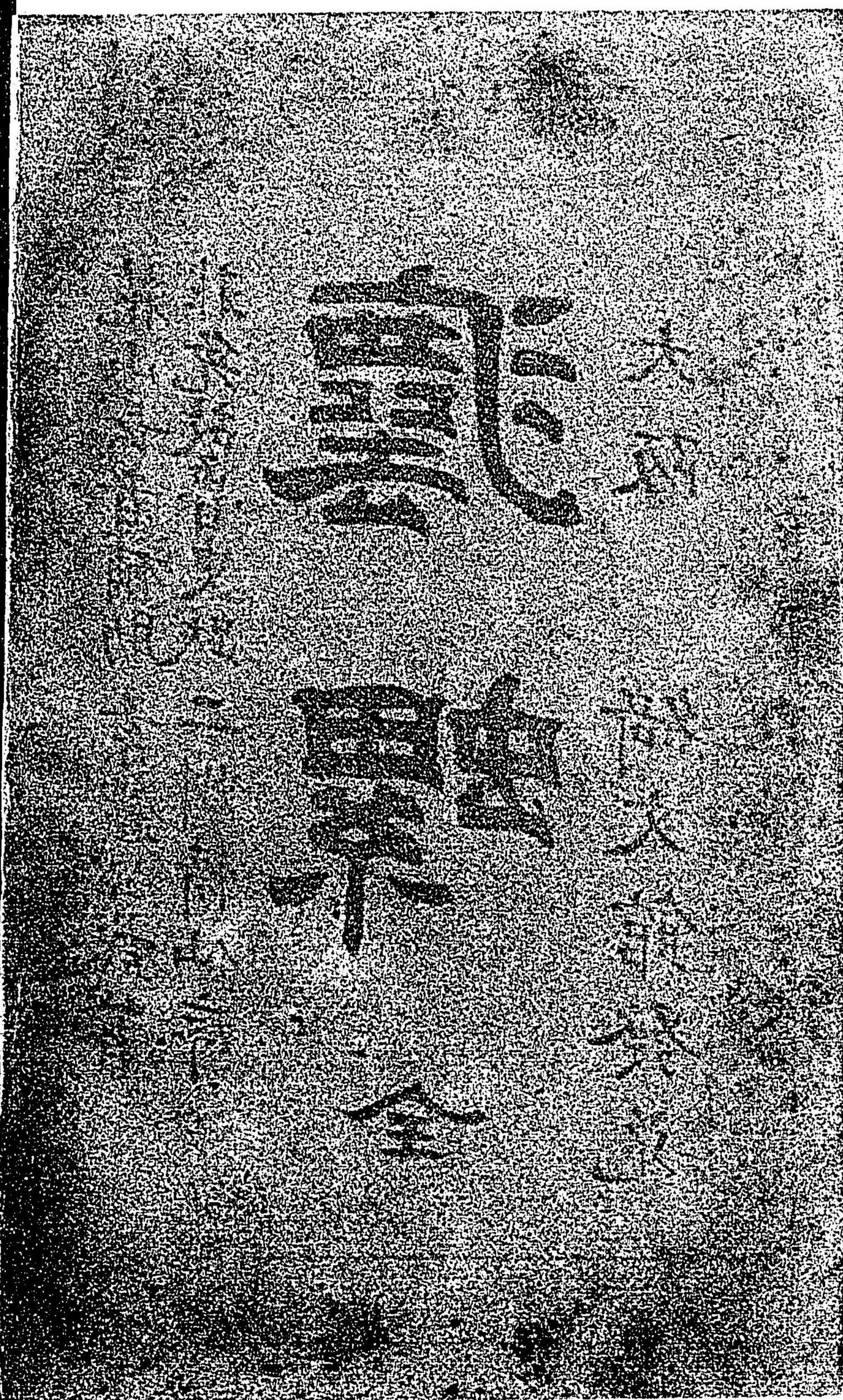
特46
618

No 15370



序

素鐵公と云ふ人有り隨分驚いた呆れた法螺吹
 法螺たるは非ぞ湯屋男が溷
 たりと云ふは非ぞ祭文讀の法螺に非ぞ
 之を要するに其法螺ハ則ち大言なり虚言あり出放題
 なりされば元より罪咎無一素鐵公頃日一書を綴り余
 示しては日々是見たまへ僕が一家言だよと余執て之
 を讀むとナール至奇至妙善哉善哉聞く毒にかるもの
 ハ薬みかたかり此書もとよ毒にならば豈よ薬よあ
 らんや沈香たるざれば屁もこか老之を世に公けよす
 るも何を妨げん乃ち所思を録する恥かくの如し
 子の年師走月 友人 花山長者誌す



自叙

法螺ふくとくの三年目、いでや法螺吹いてみん、些が事を
と、飴細工のやうに、大業を吹き立てみん、人相學によれば、我が相たるや、實シケンシンの福相よ非ぞして、雑巾も
てソコヲコ、ラふく相なり、然れば餘り褒えられた方
てハ無一我元より君子なれば、謙讓の意あり、争て褒め
られぬものを褒め、褒めたる可きものを褒めぬ事もある
我が言ふところ、法螺は則ち法螺ありと雖も、據る所
き法螺にハ非ぞ、たとへ滑稽を言ひ、洒落を言ふとも、我
あよ我が本來の特有物たる、諷刺寓意を他よせんや、若
夫れ之をさとりぬものは、馬鹿あり、之をさとりぬものは

賢なりをふ世に賢ハ去ッて法螺かる冊子と讀めらん
めと思らそうよ云ふてみた者なり

二十一年の歳晚

素鐵公しるす

目次

- 第一回 横町で美人を目送る時、奴がソッ
ユン北山時雨濡てきたいと云話
袖ふりあふも他生の縁談さへに旨く
行末の頼もき夫婦とあり一話
嫁女が折角丹精を下紐とき一ハ養子
にあらでわる一あり一といふ話
藝者と口説おとし奔り彼方わらで此
方が陥り一伊木乃捕が伊木乃の話
来るる来るかト待明石玉と珊瑚珠
だと思ふて振れた朝に持歸り一話

第五回

第四回

第三回

第二回

第一回

第六回

嘉平治袴の典物を後家の質屋へも

て往て仙臺平に御免と断られし話

第七回

腮の下馬ハ一生徳利の酔加減にヨイ

ヨイヨイヤ佐野の貧亡ハ爲忍話

第八回

何處に如何して入鹿大臣の昔も今も

昨日よ今日よ飛鳥川と變ゆく話

第九回

法螺ぬくの風よ廻り廻る小車の憂世

そ浮沈み七旅の恥ハかき捨の話

大團圓

爾云ふ

以上

何の彼ののと

穴で御最負の御簾中へ申上ます因果まはり廻

りて著者身の世話とかりました此法螺をお読み

かすつたら「オヤ自分で自分の事を書立て丸てブ

ラリユ往生だよ可笑しいねエ」とかりと何となり

とお晒ひかさい實云ふに著者ハかりく穴を書

くやうお悪人では有ませんのではよ

と謝言とする者は素印

法螺



在浪華

花山長者補助
素鐵公笑著

霧に口演
間に鐵砲的の無のが法螺です、理におち
てハ面白く有ません情にあてハ可笑く有ま
せん目で出放題で當滅法でソシテ理の有
らしい情の無さうでかい面白可笑も馬鹿氣
た事ではないと法螺になりません其覺悟で吹立
るのです、デスカラ讀者も其お積りで……………さ
らばおさらば、

第一回 横町で美人を目送った時に奴がッ

ユン北山時雨濡てみたいと云ふ話

牛肉二百目食て、それで腹張たやうん、ドレ其處あたり
散歩ーやふト、ボツく出懸た横町へ來るゝると、彼方
から遣て來たのが、十七八のソレとも十九二十といふ
妙齡の美人素人娘とハ覺ゆぬ、勿論充分凝った當世姿、
短毛一筋もない奇麗に結ふたる鬘ハ、シカも奴とやら
で、赤い角絞をンか懸ないところ、尤も淡泊サ見れば、
誰の妾らしい、エ、仇いやらしいト見て見ぬ振志て、
通を懸けず、ちがふたが、ブンと來た麝香の匂ひ思ハ
ど振顧ると、同時に彼方も振顧った有心無心の境目に、

互ひに見交した顔と顔、千両幟、稻川さん宜しくサ
暫し目送った此方へ謝禮の笑顔、彼方がニツシヤリ
た其涼しい眼、其愛らしい口、ハテ……………己に惚きて
居るナ此素鐵公に……………

こう思ふて歸つて來て來合せた友人花山長者どれよ
話すと、長者は右の次第を打聽て、

(花)ソレハ十錢頂戴おごり玉へく

(素)否だ、奢る者は久しうらだ

(花)スルと君の話も夏の夜の夢の如いだよ

(素)先づ此處へ清盛たとへ鮮の十錢たりとも忠盛よ

ーやぬト云ふ、ソレな旨いナヨボハ無いぞよ能

く宗盛に手とめて、西光してみい、

(花)ソンの洒落位ハ平家だ源氏吾輩ハ財政を思ひ遣

てみい只貴公にユレ頼朝だ今更おんれ彼のト辨

慶一なくも貴公能く知てるだらう、

(素義朝)信西に其通なら吾輩も多少の資盛ハ苦

しうないテ、

(花)どうの頼む平家の旗色赤れ他人と思ハないて、

.....

(素)ソレぢや之ら少ハ吾輩の云通に白源氏旗

あんと双方ともに調子よ教経流石に中よ一經の間

がらとて隔心も長門ハ壇ハ浦うら免一の彼美人長者

が鑑定通り、ゾツコン吾輩ハ北山時雨、忍れてみたい量

見からば吾輩決して敢て辭し申さど候かしくだソレ

よ何故無情も無言で往過たのか知らん何ハ鬼もほ

れ己も餘程色男だわい、

自惚と瘡氣のわい人ハ無い實いふと素鐵公かどハ最

もソレが澤山有る方ふのです、デスカラ街道で見た、一

面識も無い別嬪が心中笑ッてゐるのも知らないで、只

秋波を見て、ユリヤ來てゐるよ、相違ないとの速断、随分

うぬぼれた話サ、

二三日ハ目よチラついた奴が容振、

顔え丸ぼちや、ナレド鼻ハ、ツンと高あッた愛嬌の

あるところの、圓お眼とナモンモリした口、先づ首筋の生際帯れあたり、伊達のシカも真ッ白な素足、黒塗のユツポリ、

ア、言出すと、イヤ思出すと、起ても居ても、あられかい、マアあんな美人と、

俚語「如何いあら、氣儘に添はりよか子ても辛氣な浮世

だね、ヒヤ〜」

第二回 袖ふりあふも、他生れ縁談さへよ旨く

行末れ、頼もーき夫婦とかりー話

或日花山長者、二階の欄干に凭れて、物思ひ一氣な素鐵公を見て、

(花)お輕イヤお前ハ、其處に何してゐる、

(素)私や戀風に吹れてゐるわいな、

(花)ソリヤ又どうして、

(素)明暮どうして、香物して親を大根よした一物、

(花)ソリヤ何の洒落だ、貴公ナトどうが仕てゐるぜ、

(素)紙幣、何を吐す、金ての話よ、銅貨して呉る、

(花)わかつた、吾輩が旨く遣て、呉う、必らば真鍮をどす

る氣を出すな、

(素)オット正金一分銀、

かンろと洒落れて別れまゝした三時間ほどすると、長者又ノコ〜サイ〜遣て來た、膨れた笑顔が破裂して

うら………

(花)エへへ、旨いく、使命を全うしたぞ、

(素)どう云ふ吳合だ、

點水をあびた石菫のやうに、いきり出した、

(素)どうした、

長者何ぞ言ぞ、棚の布袋然としてゐたが暫らくして

(花)貴公、喜べく、忤ハお役に立たぞよ、

(素)兼より此時あるを松王丸、ドリヤ話して聞せ、

(花)オット焼酎、サケも珍しい事だ、酔るハち斯う云ふ

話サ、彼方てハ貴公が、然う熱心な味、味も知らな

かつたと、そうだらうよ、ペルもつともな話だ、乃て

吾輩が貴公の事を話して、ソレからシヤンパンを
仕つけるが、彼方てハ大喜びで、兎も角後で御返事
を仕升からと云つてたのよ、

(素)ソリヤ彼方でも、徳利娘よも云て聞さよやあるま
い、ケレドモ吾輩はホントは、坏泉くら待くらぶれ
てゐたんだよ、

翌る日にみると、返事が来ました、筋目より何より「惚れ
た」と云ふ一念を、持参金とも、七箇の荷とも思ふて、貰ひ
受ませうとの便り、此方もとより、少とも些も異議ある
どころか、オイソレと承諾して、サテ彌々吉日良辰を擇
んで、輿入し、ました媒妁役の、花山長者サ、之ハ仕たり、アッ

思へば、咄嗟の縁談、ハテ覺束かき婿殿よな。

第三回 嫁女が折角丹精を下紐ときしハ、養子

よあらで、わるゝありと云ふ話

三々九度の盃一て正月も一祭禮も一サテ一年餘りもして、何も彼もこかり出した、スルと崇め奉り一山の神をソロく、尻よ抽斗や戸棚の鍵ハ投置て、土藏の鑰もて預る身分とありました、乃て素鐵公も金庫の戸次シメたり、ドツコイ他人の自由にやさせぬト、表ハ眞面目に帳面あへせど、内分てハ曰く交際費、曰く調度費なんゝ、獨合點の誤の字、魔の字も多うッあるそうです、閨房の中にめぐらす計略、とにがくよ嫁を欺いたが、サ

テ親爺が勿々くへない多年の功勞と誇顔よ、隱爵の位に居ながら、尙ほ家政に何彼と、口を出はらして……先づ親爺の目に止りしハ、金側の時計、午前に打點頭て、午後にはヨット來い、

(素)へエ御隠居様……ナ……ナ……何か御用、

(隱)サア近うく……外でもかいが、

ト改まり一詞の端、隱居ハシロリく眼を光らせ、

お前よ話を仕るゝ事がある之を御覽、

素鐵公の前よ出されたハ思ひ懸ない女郎の無心狀、

之ハ何だい……オイ之ハ何だ、

漬茶にこそく素鐵公何の返事も無ッた、

之は何だよ、此隠居が目の黒いうちハ、ユレ、みんなものに用い無いぜ、チトお嗜みおささい、お前などハホントは養子でゐて、わるい、だ、此隠居も一生の買ふぶりサ、又媒妁人の花山長者も、的にならぬ人だよ、先達て北の平辰へ、お前と同道しあそうだが、ソンの事ハ一あら十迄皆を隠居ハ聞込てゐるから、もう花山も然う云ないで、否應かゝに即刻出て貰ひませう、お前が居なくても、少とも不自由ハ仕ませんから……

丸で小兒の喧嘩みぬやうな譯の分らないやうな、其癢に老人の一職な、理につんだ言葉よ、ハイ、ハイとよ返

答の仕様もなくて、持参の風呂敷包三ツをり、えて左様ならとも、何とも云ないで、嫁の留守よ、其家をまわり出まゝ、指をツてみると、丁度四百五十日目よ……と、もあらう、七偏人も一步を譲り、八笑人も三舍を避くる、お人品ですもの、之が續いてゐまぬうら、たまるハ、借金ばりりてさアね、

第四回 藝者と口説おと、奔走彼方ならて此方が陥り、伊木の捕が伊木の話

一たび養家を放逐せられてより、素鐵公に、おかに狂ひ出して、サテ或花街へ晝夜出入し、お、ナレドモ元より、然程もてる方ても無いから、自分も不快に思ふてゐたが、

如何なる物數奇ハ知らぬと小龍といふ藝妓が少一
氣が有るらしい見へた、ユイツー一番口説てこやふト或
時一杯機嫌で口説てみました。

(素)ぬエ小龍どうだい巳の言ことを聴て呉れかい
ぬエ、

(小)アレ又旦那、ソンの事を仰しやる……何ても旦那
の仰しやる事あら聴ませう、ソレハ然うと旦那郎
君アノ千両幟のソレ、稻川の内とね、鐵ヶ嶽が何と
り云まゝあるツケ終、

(素)魚心ありや水心か、

(藝)とうとすく、

(素)ソレが如何だい、妙な事を云ふね、

(藝)何でも無いンですよオホ、

(素)時に小龍、どうだ聴て呉るか、

(藝)事と品とに因ツちや聴ませうよ、

(素)大概お前も、己が何を云ぬか、知ッてるだらう、

(藝)存じませぬぬオホ、

(素)お前の好きか事だ、

(藝)芝居のお供でせう、有難い

(素)イヤそうじゃあ、

(藝)簪でも買ッて下さるの……

(素)イヤ

(藝)何てすねエ、

(素)お前もナト氣を利せよ、

(藝)何てせう、

(素)不粹なことぞ云ぢやないよ、

(藝)だッて解りませんもの、

(素)馬鹿いへ、わからんぢふが有もんぢ、

(藝)ホントに解りませんよ、

(素)ぢや教へてやるう、先づ側へ來い

(藝)イエ此處で宜しい、サア早う教へて下さり、

(素)サ教へてやるから、側へ來いと云ぬに、

(藝)アレー……………お止なさいよ……………鬻が崩れます

よ……………嫌ですよ、

(素)い、ぢや無いぢ、

(藝)イエいけませんよ、

口説くこと度々及んだが風あぬりの柳程よく受か
がして、小龍はいけも旨く脱着てゐて、仕て遣ッたぞ仕
て遣ッぬぞ、ユソク素鐵公から物を取込まゝ、小龍
元來藝妓にハ似合ぬ財産家で、それからして、素鐵公ハ何
う仕て遣うト思ふぬが、今ハ身と仇とをツて、サア大變
といらとりが、みいらよありまゝ、

第五回 來るか來るうト待明石玉と珊瑚珠

だト思ふて持歸り、話

小龍も勿々食へ無ッゑから質八おいて工面面エーて、
其とり還ーかたぐ、女郎征伐と出懸まゝゑ、

二階の段梯子、トンくく、草履のおとパタくく、

(素)ソラ来たぞ、来よッたぞ、

素鐵公ひとり廻部屋よ居て狸してゐると障子の音ス

ーウ、来るかと思ふてみれば、アラ嫌ね

(素)オヤ彼方の部屋、お門違ひだ、

かゝる事、二度三度よ及んだから素鐵公ハ怒りに任せ
て唾壺を敲れ付ながら、

(素)エ、馬鹿に仕やがッた、折角金策して来て天の川

懷抱ととびやふと思ッたに……………

折から隣りの樓で書生の鈍調子、
うた「金策して来て愉快とすれど、

萬方多難是登臨ス

双枕一頭で床の番、

之を聞く素鐵公實に斷腸の思ひ、

(素)エ、冷評してゐるぞく、忌々しい、どうか仕て呉れ

う、左様だく、

と云ひ乍ら有合せた鍵で箆笥の抽斗をユザあきて、

(素)オ、是れく、旨い、

何やら懐ろへ押込んでサテ手を拍いた音、ボンくく、
樓丁が出て来まゝした、

(素) オイこう一体不都合ぢやないか、人を馬鹿にしてゐるぢやないか、

樓丁 揉手しなから、

(丁) ヘエ……イエ……決して然う云ぬ譯ぢや、

ト云ふて頭を掻き、

(丁) 仏いませんのですすが何分今晚の花魁もお客がツンで居ますので……ヘエ……イエ、

(素) そうなら然うと、何故初めに云ないのだ野暮を云ふぢやないか、ホントに馬鹿々々しいや、もう歸る

(丁) 又どうか……お近い中に、

(素) 馬鹿いへ、誰が又と来るものか、

(丁) イエへ、まア然う仰しやらないで花魁も大分大官に憧れて入ッてやいますから……どうか
屹度……

(素) ウ、ウ、ウ、フ

素鐵公 專賣の笑ひ様をして、梯子をトン／＼、樓丁
高聲よて、

(丁) 花鳥さん……お歸りだよ、

花魁 走り來て、

(花) オヤ……左様から

素鐵公 見向きもせぬ、ツウツツと歸ッて來ました、

花山長者も随分ぬられですから、何時も悪い事を仕て来るそうです。鐵瓶の中へ小便したり、夜具の中へ小便したり、寢衣で涕かんだり、能くソソなど

を爲るそうです。よ甚だ宜くない。素鐵公家へ歸つて懐るから例の物を取り出してみると、

(素) オヤ、簪だ、珠は……… オヤ、明石珠だ、珊瑚珠では

無くツて………

第六回 嘉平治袴の典物を後家の質屋へも

てゆきて、仙臺平に御免と断れし話

素鐵公の囊中無一物となつたが、サテ金策に左や右思案してみると、横町に後家どの、質屋が有る、シカも色

好みな後家どの、……… 是は仙臺平の袴が有る之

と其處へ持つてゐて、ドリヤ金策ーやふ

(素) へ、エ、御免

(口) 何誰………

(素) ハイ、私です、

(口) 私とい………

(素) 典物をもつて参つたのです、

此聲が慾の引力出來た後家の斜睨之が色の引力

(後) オヤ、貴郎で来たか、

ト云ふて、ニツコリ笑めたさま、飛つきそいな、

(素) 御面倒を致します、

(後)お持ちになつたのは何品です
素鐵公嘉平治袴をつき出して、

(素)コノ仙臺平で何程お貸下をります。

(後)へエ、チヨイと……………

後家は手に取上げて吃驚

(後)オヤ嘉平治です。

(素)イエ仙臺平の積りです。

(後)ソリヤ大變な違ひてムいますよ……………オヤそれと

……………こゝが破けてゐますよ。

(素)どうです、ふくるべでせう。

(後)イ、エ

(素)ドレ……………

但見て吃驚

(素)オヤほんよね少とも知らなかつた。

後家を知りつゝ、知らぬ振する此人も勿々人が悪いよ

ト思ふたの、ソレとハ言なかつたけれど、袖を其口よあ

て、

(後)オホ、

素鐵公も夫れと悟ツて、

(素)ウ、フ……………シカシ何程貸して下さいます

(後)へエ

と云ながら替て頭を掻き乍ら、

(後)とうとムんすねエ……………貴郎ですら餘程奮發
しまして……………ダガほんとも嘉平治ハ新ら一ツ
くてもお安いでムんすから、お氣の毒をまです
よ、コレより外の物ですと子、

(素)シカシ何程ですり

(後)とうとムんす子……………ユリヤお止なさる方が宜

うムん流よ、

サア大變、自分ハ勿々色男だと思ふ、自負心が有つたも
のですから、此方の言ふ通りよ、一圓かせッラ一圓、二圓
あせッラ二圓、三圓あせッラ三圓と云ふて、一もなく二
もなく承諾した上に、ナト夜分までもお遊びに……………位

などハ云ふて呉れるだらうと思ふてゐたに之ハ仕た
マ、ペケペケ漬茶にこそ、歸宅したのも無理ハない、

第七回 颯の下馬ハ、一生徳利の酔加減よヨイ

ヨイヨイヤ佐野の貧込ハせぬ話

「モンゴルアルタイ」民族中にも、オヤク素鐵公のやう
な人が有りますよ、一ばく失敗つても、まだ屈ませ
ん、今ハ彼も此も遣ぞこなッて百計つき夜に釜ぬく様
を、モテユイの話もない折から去る有髯公が馬丁を
、えられると云ふので、ズドンと身をおとして、其馬丁
になりましたが思へばく、敝襦袍を着て、狐褌に恥忍
志イ一ヨさてもく、

サアそうなるど滅多に食ひおと一はふらぬ人が濁らば我も濁れ時世時節だ臆の下馬とあつても出世さへすりや何爵の肩書も得られぬ譯でもない先づ一きばり働いてみやふと精に精を出してゐました所へノサく遣つて来たのが別人てハぬ例の失望の媒妁人誰でもない花山長者サ、

(花) 貧すりや鈍するだ貴公ハ随分身を落した一淺まーい心にかつたねエ、

(素) フン彈り乍らだお安うハゲエせんぜ公者の盗人よアハ之でも見識の有る者サ、

(花) 尤も……………もとと糺せば貴公でも立派な人の

子てハ無いのだ、

(素) イヤ立派だよ吾輩の親爺ハ立派な貧亡人サ、

(花) シテみればあまり出世すると親へハ不孝にあたるだらう、

(素) 當然よ、

(花) 自分の良心よも恥るだらう、

(素) そうサ尤も

(花) ダツテね、ボシヤくくクシヤくくね……………
………彼人等だツて、そうだらうぢや無いの、

(素) ヒヤく

(花) 閑話休題として近頃仙遊行ハどうだ、

(素)明石玉失敗以來往かいよ、

(花)例の王さまハ……………

(素)アノ横町の質屋の點かゝり割と固い者だ到底力不足なりだ、

(花)そうり、ソレでハ小籠ハ、

(素)奴にハ宿怨を結んで居るのだ他日吾妻新誌の再興と遇ふれば開卷第一に先づ奴を罵る積りだ、

(花)ヨシ玉へく、佳人何の罪も有らんだ皆を貴公が痴愚なるの致に所サ咲ぬ櫻に何故駒繫ぐわるい

(素)貴公何うお庇もある、

(花)勿論……………

(素)イヨ一濟一込んだナ、

(花)オイ知らねエのかアリヤ此處の且的のレユだよ、

(素)まさか……………アレが、

(花)サア其處が思案の外だ此處の且的も偽紳士の偽君だらねエ、

(素)勿論そうサ此處の旦那に限らないよ、

(花)天下の人皆な然りか、

(素)そうサ六十餘洲是に到ッて彌々危ういかアハ、
第八回 何處に如何して入鹿大臣の昔も今

も昨日よ今日よ飛鳥川と變ぢく話

某の有髯公大阪へ罷り参らるゝと、おツて、サテ素鐵公も大阪へ來ましたが、斯うしてゐるうちに一年、彼れ此れしてゐるうちに二年、矢を射るやうに、年ハ過去まゝしたスルとそろく、懷舊の念が發りました、無理もムいません物なれぬ大阪より、ソリヤどうしても物慣れた東京がよろしいら子、或時体屈して、ア、と欠伸の下から、かう云ふ獨言を云出してました、

(素)ア、ア、ア、奴ハどうしてゐる、今頃小龍ハ……………

ア、花鳥ハ……………半七さんぢやないが今頃の何處に、どうして居やいやんすやら、ホンに思へば……………なんかいんと洒落どまるぢやない今とを

ツてみると、起請証紙も皆お仇サ、ソリヤ聞えません、傳兵衛さん、おんかと言ツて、呉れる奴も無いから、弾く其主ハ、わらねど、うわッるハ、巳が身の上、昨日よ、今日よ、飛鳥川淵瀬ハ、ハ、ゆく世の習ひと、ハ、情ない情ない情ない身ハ、木ハ石ハ、つめれば痛い、木で、わかい、こそぐりや、癢い、石ぢやない、矢ッばり人ぢや、人ぢや、わい、ま、上園八節でもうたふてやらう、

チ、ひくハ、く、あのうゑで思ひ出す、この月見ハ、奥座敷太夫と己がつれ、弾で、ひいた時のおも、しるさ、そのひくぬ、は、わらねど、わつた

はおれが身の上、あいつがーんていもあのやう
 よあらうと、「おものぬ人よせきとめられてい
 まハ野澤のひとつ水」ほんにさふじや戀もまこ
 とも世にあるとき人の心ハ飛鳥川、うわるハつ
 とめの習ひじやもの、あハと寧ろいんてくれ
 ぢ……………すまぬ心の中よも暫しず
 むハゆゑりの月のあび「むざんやな夕ぎりハ流
 れの昔あつあーくおつとのぬじめ身にこたへ
 飛立つ心奥の間の首尾ハ、

ア、もう云まいく、思ひ出ーや氣が燃らア、
 已見松柏摧爲薪更聞桑田變成海古人無復洛城、

東、今人還對落花風、年々歳々花相似、歳々年々人
 不同、寄言全盛紅顔子、應憐半死白頭翁、此翁白頭
 眞可憐、伊昔紅顔美少年、公子王孫芳樹下、
 アハ、、、どうも世間ハ苦み八分に樂み二分だ、
 ハテ書いたもの、讀む物ハ皆を已が心を云ふてあ
 るわい、

第九回 法螺ふくれ風に廻り廻る小車や憂世

ハ浮沈な、旅ハ恥ハめき捨の話、

素鐵公馬丁としてゐる中にや、貯蓄心をおこーまー
 て法螺ふくの風が廻り廻ッて少ーは金が出来まーあ、
 乃て又もとの道樂にあッて、ソロロ酒を飲み出ーま

「たが或時酒に酔ッて浮れ込んでゐるところへ例の花山長者が遣ッて來ました。」

(花) どうだ素鐵公大分勢ひが良いやあらう。

(素) どう云ふ風の吹廻ーだぜ。

(花) 福の風サ。

(素) ソユで寶代入船。

(花) そんなものサ先づ……………

(素) どうだ長者東京の近況ハ

(花) 一別以來の事を語らうぜ。

(素) 謹聽々々。

(花) 先づ根津が洲崎へ夕ツツて今ハ黄金叢と云ッて

ゐるが實にそうだ沖の彼方に白帆が見へる随分

い、ぜ詩人あらば白帆を鷗ととも見るだらう。

(素) 大分生意氣よなツたねエ。

(花) 知れたこツた今度博士に……………

(素) なツたのぜ。

(花) からかいのサ。

(素) ソリヤつまらんじやあいら。

(花) つまツてゐるよ。

(素) 金よ。

(花) 勿論……………

(素) 褒めた話でもあらうつまツて好いものは烟管位

だらう。

(花) 話次分頭として、どうだ。

(素) 東京の景況を承をらう。

(花) 畏まった。

(素) シカラバ早く。

(花) 大器の晩成だ。

(素) 何の大器か。

(花) 吾輩が大器で、貴公が小器だ。

(素) 吾輩が小器なら、貴公ハ鬼だらう。

(花) 一体ソリヤ、鐘鳩の沙汰で云てるのか。

(素) そんな者うも知れぬいと。

(花) ドリヤ木題に移らう。

(素) 根津オツト洲崎よりハ吉原をやれい。

(花) ソリヤ吉原だ。

(素) 中米ハどうだ。

(花) 相變らぞだ。

(素) 河内樓ハどうだ。

(花) 相變らぞだ。

(素) 八幡樓ハ……………

(花) 相變らぞ。

(素) 新萬ハ……………

(花) 相變らぞ。

(素)新九龜ハ……………

(花)相變らぞ、

(素)松山樓ハ……………

(花)オット夕露お職の近状だらう、

(素)いひ玉ふか〜、

(花)思ふこと云ねば腹ふくるゝだ、

(素)イヤそれ兼好〜

相も變らぞ、洒落いふて、面黒狸の腹鼓み、ダウ〜ダテ、
り〜の三番叟、おきか〜と、勉強うツちやりうかう
い〜こゐるうちに、オヤ明治廿二年、お來ましたぞ、

大團圓 爾云

右のやうかとほうとしてつもない事を喋舌り立て、花山
長者と素鐵公ハ面白をいふ笑ひあツて居ました、
コウ云ふ連中ですら、いば〜浮つ沈みつ、矢鱈に恥
と書きちらして、ソシテ旅の恥ハ書き捨てたとサ、呆を
ツちまふよ、我ながら呆れツちまふよ、我ながら愛素が
盡きま〜したよ、ヤレ〜億れたア、之が法螺と云ふも
のだ、さうです、脚色といふものも分らなくツて、小説と
ハ云はれない、何と云ふて好いやら、私にもサツパリわ
からないンですよ、と云爾

本篇ハ只書流して、必竟座興です、洒落ばかり多
くて、何だか分らない、其分らない處が、即ち法螺

るのどす、ト著者ハ申一て居ますれですれです、

法螺終

跋
 素鐵公は妙なる人なる妙なる人にして妙なる著作をなす元
 より其當を得たり豈に之を怪むに足らんや曩きに
 ハ社會燈てふ雜誌に小説家の袋といふを書き其後穴
 といふ冊子を綴り又た滑稽大演說會といふ冊子を綴
 り今又法螺といふ冊子を綴り愈出て愈奇なり法螺
 の如きは其表題既に奇なれば通篇の奇なる知る可き
 べみ、ア、此妙なる人にして此妙なる著述あり今にして豈
 に其當込を怪むに足らんや乃ち所思以記して以ッ
 て責ふさびと爲すと云爾

明治廿一年歲晚於大坂

辱知 非免故魯史 誌す

法螺略評

法螺と云ふ表題なれば元より法螺を書なせると疑ひ
 有る可うらむ著者も先づ開卷第二に其由白狀しあり
 今にして之を云ふハ迂濶甚だしきに似たり十日の菊
 六日の菖蒲の感なきにあらざれば之を小説とする
 にしるスケツチとするにしる法螺てふ表題にて其當
 寸法なるを知る可ければ通篇の錯雜せる矛盾齟齬の
 事など有るハ讀者お見ゆるし有りて然る可し
 之ハ素鐵公花山長者が合作なれども素鐵公の戯著と
 し花山長者の補助と書けるハ蓋し故あるなり
 目錄 附會ある痕跡れど随分旨く付るあり本文の割

よハチト長すぎぬと思ふが如何、

第一回

壓巻あり、山からは富士川ならば大井花から

は櫻香ならば蘭、まだしも梅の、おんかと褒免

る程でも無いに………

第二回

中出来あり褒免るよ褒められど、眩すに眩と

れぬなり酒類の洒落中ヘルモットモとハ、恐

れ入ッたり談判をシヤンパンとの捻り方あ

まり遠し、

第三回

親爺を御隠居様とハ、おあいそうかり親爺の

短慮あまりとや情か、今少し色氣を持せぬ

いものなり、

第四回

上出来あり、シカシ今もこし進み、話の脚を、

何故にハ書ざり、や丸て末段は落語のやう

か感あり、

第五回

誤経験と見へぬ、吉原か根津の安店であッ

た事と見たハ、僻目か、そうじやろう、シカ

シ花山長者云々、悪い事を暴露したものなり、

第六回

後家ハ言葉ハ、熟さぬ節あり、再考ありたれも

のかり嘉平治と仙臺平の間違ハ、思ハ、噴飯、

第七回

チト見出しと釣合ぬやうなり、釣あハ、ぬが法

螺ハ、此段すこし痛快なり、

第八回

つまりつまッて仕方を、に附會たのか、甚だ

第九回

むつかしい毛唐詩選などを惹出したりほこ
りた、き然たる獨言よせば好いに……
少々目次と釣合ハぬやうなり無残にもつま
らない事を以て行數を埋めたり書肆ハ曰ん
此原稿ハ如何になりませんかぬ、

大團圓

呆れたり著者の誤自身漢呆れたるより呆れ
たり呆れて物も言ハれぬは此ところ評を
通篇を案ぶるよ退いて謹んで案ぶるに此書などハ
ホン代護摩化一なる著者の口吻をありて言へばデモ
著述なり學士大家ならば、ユンな著述ハ得せぬかり得
せぬるらしてソユが直打なり試みよ去ッて之を巴里

倫敦華盛頓、コンペンハーゲン、コンスタンチノープル、

ストツクホルムセント、ペエタースボークアラシル伯

林マドリッドリスボンローマ北京東京等の最も立派

な書肆の發兌書目を見よ恐らくハ之なけんシテみれ

ば先づ近來稀有の著述なりぞありやたく、

戊子臘月

犀知

二州情仙

妄批

法螺大尾

版權登錄

明治廿二年二月二日刷成
同 年二月六日出版

著作兼
發行者

大阪東區內本町二丁目百卅九番屋敷

藤谷虎三

大阪西區江ノ子嶋上町壹番地

瀬戸清次郎

印刷者

大阪東區唐物町四丁目十二番屋敷

岡本仙助

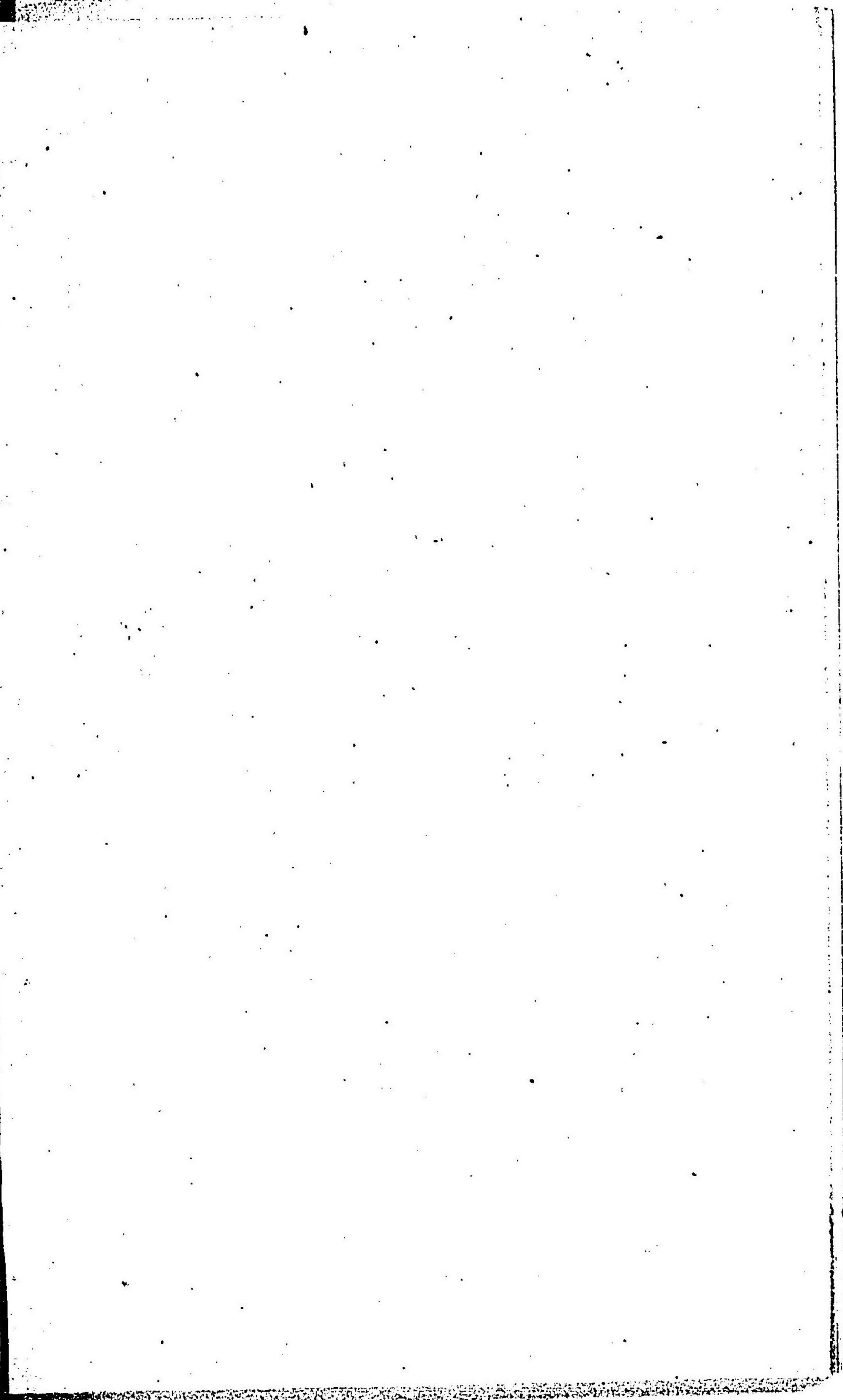
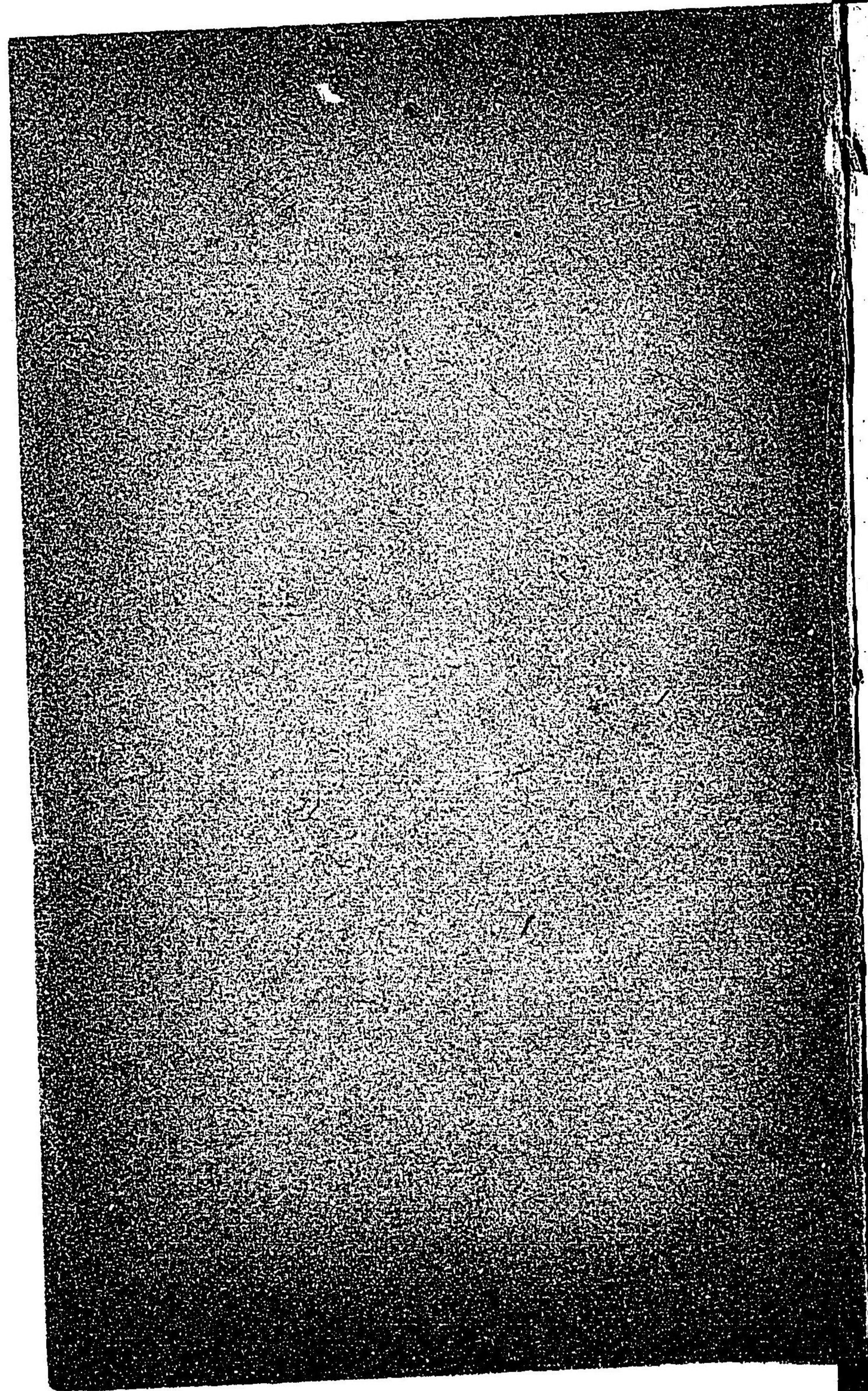
發賣者

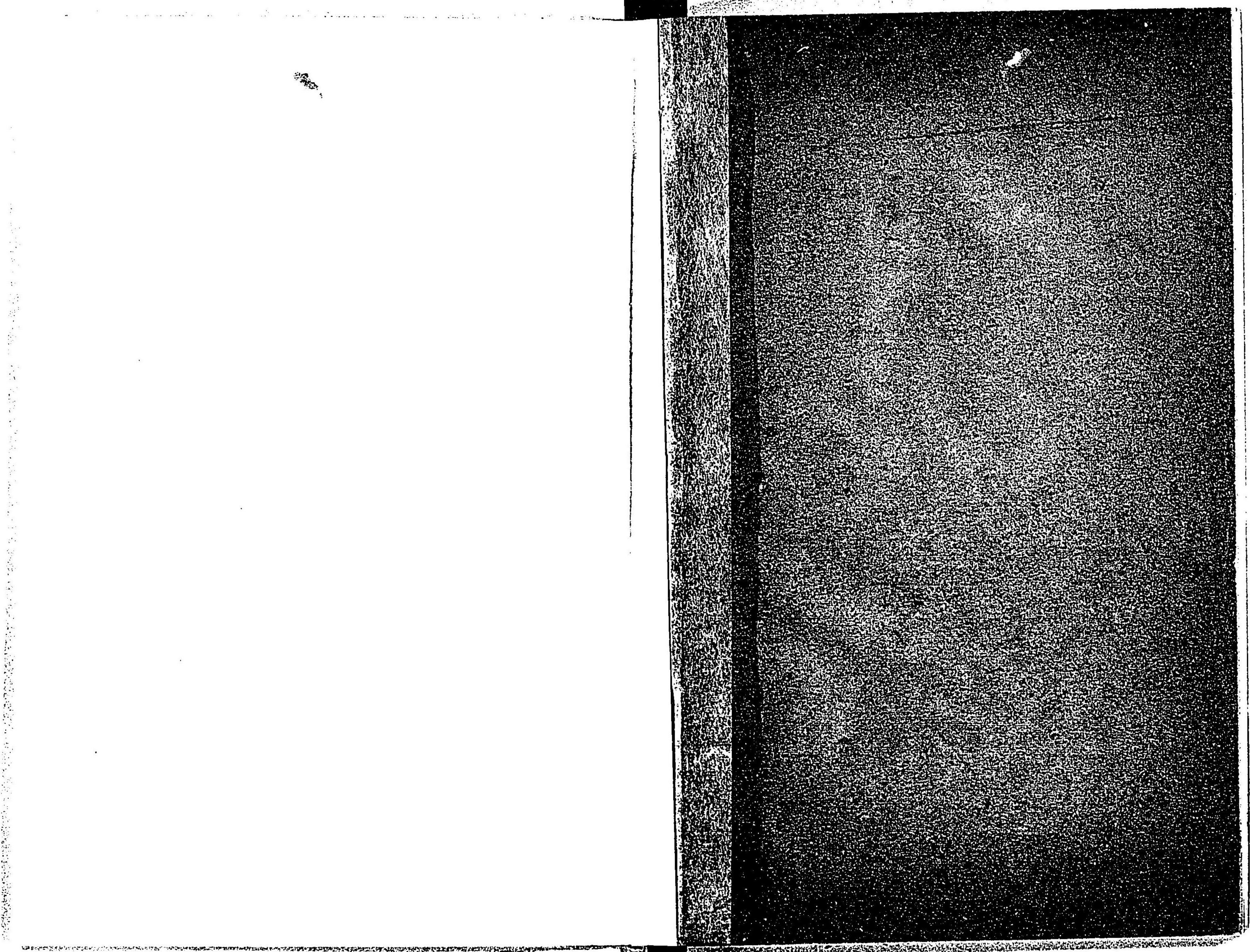
大阪南區末吉橋通四丁目八十九番屋敷

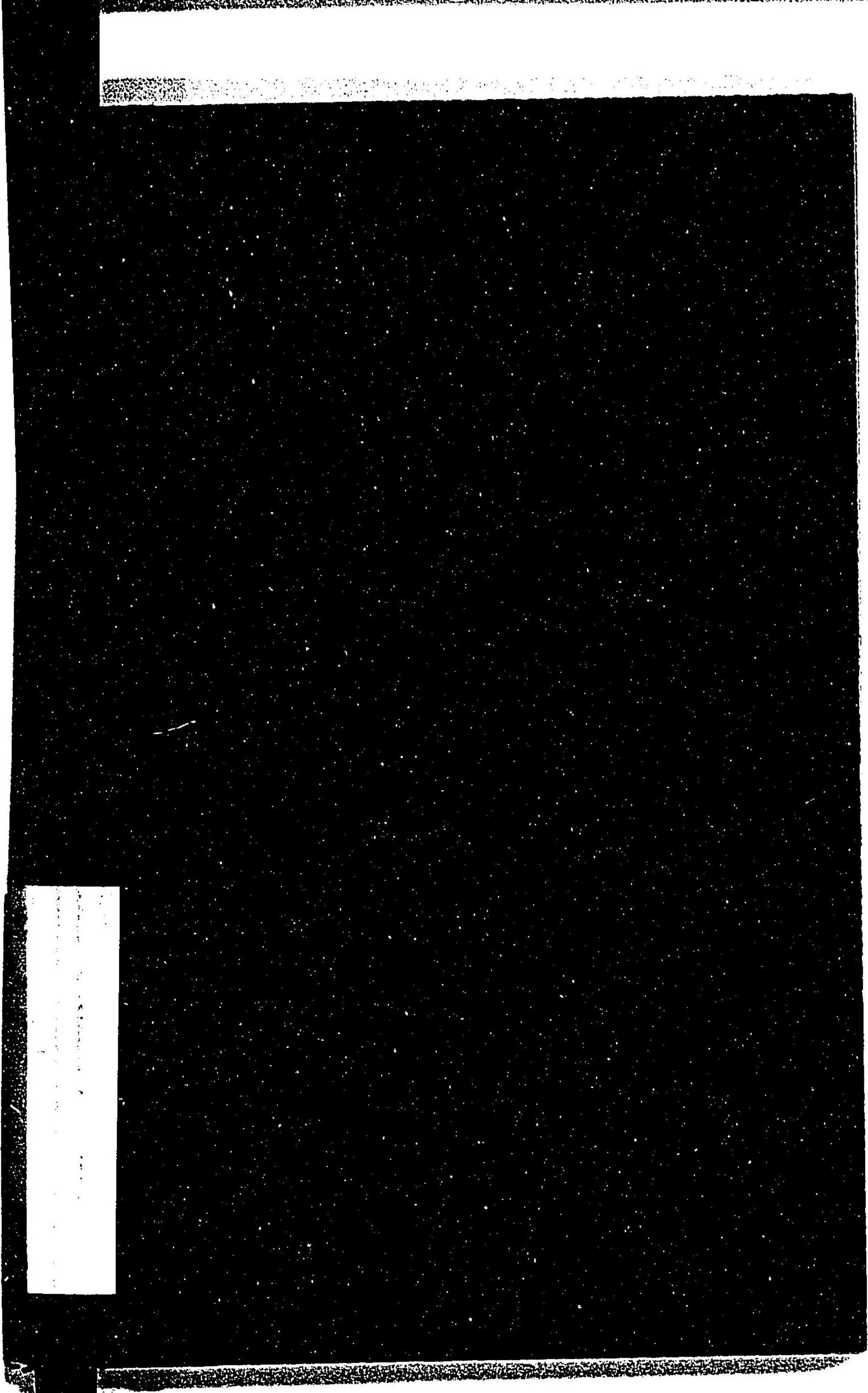
中村芳松

發賣者

版權所有







Vertical text on the left side of the dark area, possibly a page number or header.

Vertical text on the right side of the dark area, possibly a page number or header.

特 4 6

618

法螺

国立国会図書館

091875-000-1

特46-618

法螺

素鉄公/著

M22

DBO-0407

